

3年生のトムラウシ登山:66年前の記憶

大塚 榮子 (1期)

1956年の夏休み、藤間先生をリーダーに、山岳部の横山君をサブリーダーに大雪山縦走の計画が始まりました。全員は思い出せませんが、松原、渡辺君が印象に残っています。クラスの女子を誘えなくて文学部の長尾さんを誘いました。一週間分の食料など横山君が計算したと思います。寝袋が必要ですが、物の少ない時代ですから、質の良いシュラフザックは朝鮮戦争のアメリカ兵の死体が入っていたものが「消毒してございます」と言って運動具屋で売っていました。4丁目近くの店で買ったものには名前が書いてありました。

旭川駅のベンチで夜を明かし、一番バスで天人峡温泉に向かい、トムラウシを目指します。雨が降り出し、霧も出て暗くなりましたのでテント泊をして、翌朝起きると目的としたヒサゴ沼の避難小屋が目前にありました。当時のテントは木綿の帆布ですから、雨に濡れてずっしりと重かったと思います。多分横山君が担いだのでしょう。全員、目的のトムラウシの登頂を果たし、次は忠別岳の避難小屋を目指しま

した。5万分の一の地図で見ると傾斜がきつくなかなかたどり着けません。山登りに比べたら実験室で一日中立っているのは楽なものだというのが得られた教訓です。

ここで雨に降られて停滞しました。朝ご飯を食べると昼ご飯の準備をし、昼をたべると晩ご飯の支度です。停滞すると疲労回復して沢山食べるようになるのがわかりました。登山ガイドは食べっぷりを観察するといいます。お米、ジャガイモ、キャベツが主でコーンビーフの缶詰が頼りでした。次に目指したのは白雲の避難小屋ですが、雨が降ると次々と人が来て、ぎゅうぎゅう詰になりました。そこから黒岳はすぐですから、黒岳に登った後は層雲峡温泉まで、登山道を一気に駆け下りたような記憶があります。ロープウェイなどが無い時代のお話です。

兎に角全員無事に縦走を終えたことは幸いでしたが、しばらくは筋肉痛に悩まされました。

同窓会 HP:2022年10月27日公開